九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

土器動態からみた弥生時代地域社会構造の研究

石田，智子

https://doi.org/10.15017/1455993

出版情報：九州大学，2014，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

論 文 審 査 等 の 結 果 の 要 旨

北部九州地域の弥生時代中期は、日韓海峡を介した物資・人・情報の相互交流が活発に行われ、社会の複雑化が進展した段階である。本論は、多様な規模・種類の重層的な集団構造や関係で構成される当該地域・時期の弥生社会を対象として、社会変化プロセスを実証的に解明することを目的とした。

研究の目的・研究史の到達点と問題の所在を整理し、その解釈のための方法と資料を確定した第１～３章につづき、第４章では、土器に反映された地域社会の空間的範囲の実態とその動態を分析した。具体的には、型式学的手法に基づき形態的特徴を共有する範囲を検討し、地域的特徴を示す器種や属性を析出した。さらに、地域的なまとまりを示す空間範囲内部の多様性や関係性を明らかにするために、従来看過されてきた文様・塗彩などのデザイン関連諸属性の質的差異を検討し、加飾した土器に付与される意味がそのような範囲相互の間で異なるという点を指摘した。以上を通じて、従来均質に捉えられていた地域内部に存在するミクロな地域性および地域間関係の変容プロセスが明らかとなり、その結果社会変容が当該地域全域に一律に生じるのではなく、時期差・地域差をもって多様に展開する状況が明らかになった。

つづく第５章では、弥生土器の物質特性を考慮した地球科学的高精度胎土分析方法を新たに開発し、具体的な考古資料に適用した。前章で考古学的研究手法によって土器諸属性の時空間的差異を検討し、集団関係の具体像の復元を試みたが、特殊な原材料を用いない土器の場合、肉眼による土器移動の検証や、土器情報伝達が生じるメカニズムの検討は困難である。日常的な集団間の相互交渉を復原するための基礎となる土器の製作地や生産単位を検討する上で、土器の原材料物質そのものに直接アプローチできる胎土分析は非常に有効な研究手段である。特に、特定地域間関係が活発化する弥生時代中期後半期の玄界灘沿岸地域に焦点をあて、地域社会の形成基盤となる集落内の居住集団関係や近隣集落関係、地域社会を広域社会に位置づける遠隔地域間関係の多様な空間スケールを対象に、土器の生産と移動を検討し、地域的特徴や変化が発現する過程や要因を論じた。分析の結果、基本的に土器は各集落単位で生産されること、同一集落内で異なる系統／製作伝統に属する土器が共伴しても、両者の生産単位は一体化せず自律的に併存することが明らかになった。さらに、玄界灘沿岸地域から壱岐島へと、遠隔地域間で土器が移動する現象を詳細に検討し、土器の搬出元を絞り込むことを通じて、土器の移動現象の背後にある具体的メカニズムの解明を試みた。弥生時代中期後半期に遠隔地域間で土器が移動する事象は、当該期に西日本一円の集団が鉄などの稀少資源を求めて韓半島との交渉を開始する現象と対応しており、後期以降に顕著になる広域社会間交流の先駆けを示すものであることが明らかとなった。

以上の考古学的分析および地球科学的分析の成果を統合して、第６章では、ここまで解明した土器動態が、具体的社会変化のプロセスとどのように相関・対応するかを検討した。その結果、先行研究が提唱する、玄界灘沿岸地域を中心とする一元的な空間階層関係が弥生時代中期初頭から一貫して存在したのではなく、土器の移動・影響関係が示す地域社会の中心地は、弥生時代中期初頭から末へと徐々に玄界灘沿岸地域、特に福岡地域と糸島地域に集約していったというプロセスが明らかになった。北部九州地域の弥生時代中期は、社会の複雑性は増大しているものの、多様な変異の生成と収斂が繰り返される流動的な段階であり、社会構造は徐々に複雑化しつつも、高度な複雑化・成層化は遂げていない可能性を指摘した。

以上のように、本論は、一貫した基準で時空間動態を把握することができ、多様な空間スケールやコンテクストに応じた分析が可能な土器を主要な分析の対象とし、土器の原材料採取から製作に

至る自然環境との関係、使用や廃棄に関わる社会的側面など、北部九州弥生時代中期の社会変容の各段階における行為や文化的背景の、考古学的・地球科学的分析手法の有機的併用による解明を通じて、物質文化動態と社会変化との相関性を解明したものである。北部九州地域の弥生時代中期をケースとしつつも、本論の射程と含意は、考古学と地球科学の融合研究の実践とその可能性の拡張に及び、ケース・スタディを通じて、考古学・地球科学それぞれの可能性と限定を着実にふまえた学融合的研究が、論の実証性の飛躍的向上とともに、歴史叙述の内容的詳細性の向上にも顕著に貢献することを十分に示した。このような点において、本論文は当該分野の研究にオリジナルな貢献をなすとともに、考古学一般における学融合的研究のあり方においてもあらたな地平を切り開く内容をもつものであり、博士（比較社会文化）を授与するに値すると判断するものである。